

群読の英語教育への援用
—その導入と教育効果—

草薙 優加 (群馬大学)

本発表では、大学英語教育への群読の援用とその教育的可能性を報告する。近年、群読は、日本の初等・中等教育において、国語教育、学校行事などで実践されており、非母語話者のための日本語教育にも群読は取り入れられている。群読とは二人以上の読み手による、声の表現である。群読の良さの一つにフレキシビリティがあげられる。読み手の数は二人以上であればペア、少人数グループ、数十人グループまで対応でき、俳句、わらべ歌、詩、物語など、さまざまなジャンル、スタイル、長さのテキストを使用することができる。グループで読むため、コミュニケーションに苦手意識を持つ学習者も抵抗感なく取り組める。また、読み方の工夫によって、学習言語に加えて母語を効果的に使い、両言語と文化の理解を深めることも可能である。筆者は日本の大学において、教養教育の英語を主に初心者～中級下レベルの理系専攻学生に教授しているが、その学生の多くは英語を不得手とし、学習意欲が高いとは言えない。しかし、理系学生は文系学生よりも卒業後の進学や就職において英語使用の需要が圧倒的に高く、彼らの学習意欲を高める授業づくりは喫緊の課題である。そのためには、さまざまな教授アプローチがあるが、筆者はリスニングとスピーキング力向上を目指す必修授業にウォームアップ活動、学期中の発表活動として群読を導入した。その目的は、英語音声のトレーニング、英語使用への抵抗感を低減すること、言語への関心・意識を持つこと、音読し表現する楽しさを体感すること、これらの活動により学習意欲を高めることである。本発表では、群読について解説し、群読の導入方法を紹介する。そして、その教育効果を授業事前・事後アンケート、省察コメント、観察から報告する。